

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第25回 第7.3.2.1節～第7.3.2.3節

2019年1月1日

小田 勝

新年、明けましておめでとうございます。本年もおつきあいくださいましたらありますがたく存じます。

「7.3.2.1 現在推量」の続きから。198頁の用例(7)は、いわゆる「原因推量の「らむ」と呼ばれるもの。(7)の1例しかあげていなかったから、参考のため類例を多めにあげておこう。

- ・ うちなびく春を近みか ぬばたまの今夜の月夜霞みたるらむ (万 4489)
- ・ 愛しと我が思ふ妹を思ひつつ行けばか もとな行き悪しかるらむ (万 3729)
- ・ 獵高の高円山を高みかも 出で来る月の遅く照るらむ (万 981)
- ・ ぬばたまの夜を長みかも 我が背子が夢に夢にし見えかへるらむ (万 2890)
- ・ 吹くからに秋の草木のしをるれば むべ山風をあらしと言ふらむ (百 22)
- ・ 心ざし深くそめてしをりければ 消えあへぬ雪の花と見ゆらむ (古今 7)
- ・ ひさかたの月の桂も秋はなほ紅葉すればや 照りまさるらむ (古今 194)
- ・ 紅葉見にやどれる我と知らねばや 佐保の川霧立ち隠すらむ (拾遺 193)
- ・ あはれてふことを (=言葉ヲ) あまたに (=多クノ桜ニ) やらじとや 春におくれてひとり咲くらむ (古今 136)
- ・ 世の中をあきはてぬとや さを鹿の今はあらしの山に鳴くらむ (金葉 226)

同様に、用例(8)～(16)の類例も、これも多めにあげておく。

- ・ 恋しけく日長きものを逢ふべかる夕だに君が来まさざるらむ (万 2039)
- ・ 知るといへば枕だにせで寝しものを塵ならぬ名の空に立つらむ (古今 676)
- ・ 古里にあらぬものから我がために人の心の荒れて見ゆらむ (古今 741)
- ・ 大空は恋しき人のかたみかは物思ふごとにながめらるらむ (古今 743)
- ・ 山の井の浅き心も思はぬを影ばかりのみ人の見ゆらん (古今 764)
- ・ 秋風は身を分けてしも吹かなくに人の心の空になるらむ (古今 787)
- ・ 我が身から憂き世の中と名付けつつ人のためさへ悲しかるらむ (古今 960)
- ・ 音にのみ声を聞くらんあしひきの山下水にあらぬものから (伊勢集)

さて、199 頁の用例(16)は、まことに恥ずかしいミスをしてしまった。御覧のようにこの「侍らむ」は、当然「侍ら+む」であって、助動詞「らむ」ではない。どうしてこんなミスをし、しかも 4 校まで通り抜けてしまったのか、呆れるばかりであるが、重刷での用例の差し替えは混乱を来すので、一切しない方針とし、第 3 刷において、目次の末尾 (xiv 頁) に、次のような「追記」を掲示した。

< 第 3 刷追記 >

用例の掲示には慎重を期しましたが、本書中に、不適切な用例が 2 例ありました。

①p.199 用例(16)の「侍らむ」は、「侍ら+む」なので、「らむ」の例ではありません。

②p.473 用例(7)の「と」は、逆接仮定の「と」の例ではありません。

以上、お詫びして訂正いたします。

まったく、情けないことで、お詫びのしようもない。

さて、そういう次第で、この用例(16)は「才さかし出で侍らむよ。」と改められるわけであるが、そうすると、この「-む(よ)」はどう考えればよいのだろうか。「らむ」の例としてあげたのは単純なミスであるが、「らむ」を補って解釈される例としてこの例をあげたわけだから、「む」にもそういう用法があるということになるのだろうか。実際、新全集は、これを、

・そんな宮中のようなところで、どうして学問をひけらかしたりするでしょうか。と訳し(208 頁。下線引用者)、私どもの『旺文社全訳古語辞典 [第 5 版]』でも、「(どうして) そのような所 (= 宮中) で漢学の才をひけらかし出しましょうよ。」と訳している(「さかす」の項)。ここは「どうして」を補わなくても、新大系のように、「そんな宮中のような場所で学識をひけらかしたりいたしましょうか。」(314 頁) と解釈できると思うが、少なくとも(「むや」ならぬ)「むよ」で反語を表す珍しい例ということにはなるう。

199 頁◆の「など」「なぞ」「なに」が言語上表示された例」では、次のような例もある。

・岩の上の苔だにたへぬ春雨に野辺の草葉のいかで萌ゆらん (堀河百首)
次例は、同頁用例(17)の類例。

・父宮 (= 式部卿宮) 聞き給ひて、「[髭黒ハ] 今は、しかかけ離れてもて出で給ふらむ

に、さて心強くものし給ふ、いと面^{おも}なう人笑へなることなり。…」(源・真木柱)
用例(18)～(20)について。自分の事態を「らむ」で想像することは、やはり、普通ではないから、次のような場合、

・ a かばかりに忍ぶる雨を人間はば何に濡れたる袖と言はまし(後拾遺 925)

b かくばかり忍ぶる雨を人間はば何に濡れたる袖と言ふらん(和泉式部集)

aの「言ふ」の主語は作者(和泉式部)、bの「言ふ」の主語は作者の恋人と解するのが通常の読みかたというものだろう。

同頁下から3行目の「ざるらむ」について。三条西家本『和泉式部日記』の女(和泉式部)の消息部分に、

・雁のはつかにうち鳴きたる、人はかくしもや思はざるらん、いみじうたへがたき心地して

の例がある(歌文一体的文章ではあるが。寛元本は「思はずやあらむ」)。中世になると和歌以外の用例もみえるようになる。

・「いかなる盛重許されて御前にてするに、重時許されざるらん」といきどをりけり。(続古事談 5-44)

200頁「7.3.2.2 伝聞の「らむ」」では、用例を一つ追加する。

・昼つ方渡り給ひて、「悩ましげにし給ふらむはいかなる御心地ぞ。今日は碁も打たでさうざうしや」とのぞき給へば(源・葵)

同頁「7.3.2.3 現在推量ではない「らむ」のあとに次の節を新設し、201頁の用例(7)(8)をこちらに移動する。

7.3.2.4 和歌中の「む」と同意の「らむ」(新設)

和歌では、「らむ」が未実現の事態を表す「む」と同意に(「む」の代わりとして)用いられることがある。

(1) 峰寒み岩間氷れる谷水の行く末しもぞ深くなるらん(紫式部集)

(2) 鳴かずとも鳴くらむとこそ待たれけれ山ほととぎす今日はいつぞは(恵慶集)
〈詞書「一日、郭公待つ心」〉

(3) 古巢うとく谷の鶯なりはてば我や^{かは}代りて鳴かんとすらん(山家集)

(4) 待たれつる入相の鐘の音すなり明日もやあらば聞かんとすらん(山家集)
